

平成 26 年度

1 自己評価及び外部評価結果

事業所名 : グループホーム ございしょの里 1号棟

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0371100413		
法人名	有限会社 古川商事		
事業所名	グループホーム ございしょの里 1号棟		
所在地	岩手県釜石市鶴住居町第23地割21番地1		
自己評価作成日	平成 26 年 9 月 25 日	評価結果市町村受理日	平成27年4月10日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.jp/03/index.php?action=kouhyou_detail_2014_022_kani=true&JigyosyoCd=0371100413-00&PrefCd=03&VersionCd=02
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0021 岩手県盛岡市中央通三丁目7番30号
訪問調査日	平成 26 年 10 月 15 日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

活気あるグループホームを目指して、音楽療法や全体でのレクリエーションを取り入れ、他のユニットとの交流の場も増えてきている。各ユニットでもレクリエーションを取り入れたりと活動的に行っている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

2ユニットでサービスセンターをはさんで左右に1号棟、2号棟が棟続きで繋がり、1階のサービスセンターの真上が1号棟のホール・食堂と居室になっており、2号棟は1階がホール・食堂と居室3室、2階が残りの居室となっている。両棟は生活領域は独立しているが、サービス利用者も含め、日常的に交流が盛んで、幅を持った生活を送っている。震災で地域が丸ごと津波の被害に遭い、コミュニティの復活がなかなか進まない状況の中で、ややもすれば孤立した生活になりがちだが、職員の心のこもったケアで利用者は次第に明るさを取り戻してきている。震災前の活気とまとまりのある地域に戻すため、町内会と連携しながら事業所が交流の中心拠点となるよう努めており、特に高齢者世帯との交流に力を入れたいとしている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

[評価機関:特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会]

事業所名 : グループホーム ございしょの里 1号棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	・事業所理念を共有し、実践につなげていると思う。ミーティングで理念について職員全体で話し合い実践につなげています。	震災により精神的に不安を抱えた利用者、全職員の3年半にわたる「あかるく、あたたかく、まるく」支援するという理念の実践に取り組んできた結果、利用者はようやく会話や行動に明るさを取り戻しつつあり、皆の笑い声が響くようになって来ている。	震災後、今日に至るまで代表者をはじめ、職員一丸の取り組みと地域の支援により、立ち直ってきているが、引き続き当ホームが地域にとって重要な役割と機能を果たす拠点としてその活躍を期待する。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	・平成23年3月11日の東日本大震災により周囲は、家もなくなり、地域との交流はない。今後回復したい以前のように、交流するように努力します。	地域活動が活発なところであったが、震災後、転居世帯が多く、町内会は150世帯から50世帯に減るなどにより地域交流は厳しものとなっている。小中学校も高台に移転したため、来訪の機会も減り、中学生が社会学習で来所する程度である。なお、サービスの利用者やその家族との合同行事が交流が唯一の楽しみとなっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	・事業所独自の取り組みはしていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	・運営推進会議では、サービスの利用状況や行事実施報告を行い、委員の皆様からアドバイスを頂いており、そこでいただいた意見を参考にしながらサービスに活かしております。	地域関係者の出席が少ない時もあるが、運営状況を報告しながら、意見交換を行っているが、やはり町の復興、コミュニティの復活が話題の中心になっている。かさ上げた土地が落ち着くまで時間がかかり、地域の人に戻ってくるまでまだまだだが、その間、事業所としても地域が元気になるよう推進会議を通じて地域との連携に力を入れているとしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	・運営推進委員に、行政職員がおり、色々相談して協力関係を築いております。	利用者の半数は生活保護受給者であることから、福祉担当課とのやり取りは多い。地域包括センターを通じての連携は円滑に行われている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	・日中は、必ず職員が利用者の見守りを行っており、居室はもちろん玄関に鍵をかけていない。夜間のみ安全の確保の為、施錠しています。	常に外に出たい利用者があり、出来るだけお付き合いをしながら見守るようにしている。身体拘束、虐待に関する資料を収集しながら、定期的に内部研修を行っている。特に言葉による拘束が生じないよう職員間で注意し合っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	・全スタッフが、法律そのものを詳しく学ぶ機会はもてないのが現状です。年1度ではありますが内部研修を行い、虐待はあってはならない指導をしております。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	・事業所で、地域福祉権利擁護を利用されている方が、3名おります。しかし、全スタッフが専門的な外部研修を受けていないのが現状です。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	・契約の締結、解約については、サービスを利用する前に、利用者及び利用者家族に対して契約書及び重要事項説明書を用いて説明しております。その上で、署名捺印を頂いております。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	・相談及び苦情受付窓口を設けている旨、重要事項説明書に記載しております。又、見やすい場所ということで玄関に「投書箱」を設置してあります。現状は、苦情要望受付はありませんが、担当スタッフが敏速に対応する仕組みとなっております。	震災後は、家族の来訪が少なくなっているため、利用料の支払いを現金払いに変え、定期的に来所してもらおうようにしている。その機会に要望等も含め種々話を伺うようにしているが、これまで運営に関する要望等は出されていない。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	・毎日ほんの少しでも話す機会を作っている。	第1号棟と第2号棟合同、各棟単位の職員会議をそれぞれ月1回開催しており、その際、代表者も出席するなど、日常的に代表者と職員は顔を合わせ、運営やサービス支援について忌憚のない意見交換を行っている。職員の提案でタオルを温める温蔵庫やじょく創防止のエアマットの導入が実現した。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	・努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	・外部研修を受講している。 ・内部研修を行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	・グループホーム協会の定例会に参加している。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	・サービスを利用する本人から意向を伺うよう、努めております。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	・サービス利用を希望される御家族からも意向を伺うように、努めております。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	・利用者の基本情報、家族からの情報をサービスケアの参考にしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	・普段利用者、職員が楽しみ事を一緒に、楽しむよう心がけております。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	・月1回のお便りを通して、共に本人を支えていく関係を築いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	・利用者の希望があれば随時、対応していきたい。	利用者には、震災のトラウマが残っている人もいることから、かつての生活の場などに触れる場合には気を遣うようにしている。再建に取り組む家族の状況にも配慮しながら、出来るだけ馴染みの人との交流が続くよう家族との連携に努めている。	震災のつらい体験の痕跡が心の中に刻まれ方への対応について深慮しながら取り組んでいるが、引き続きカウンセラー等の専門家の協力などを得ながら利用者個々に応じた取り組み支援に期待する。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	・利用者同士の助け合いと支え合いが出来るような支援を日常行っている。食事の際、同じテーブルを囲み、お互いが気持ちよくいられる雰囲気作りを心がけております。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	・現時点においては、契約終了後に、継続的な関わりを必要、希望する方はおりませんが、今後継続的な関わりを必要とする利用者、家族がいたら誠意をもって対応していきたい。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	・日々の介護の中で、利用者の話に耳を傾け、希望や意向の把握に努めている。	食事や入浴など日々の生活の場で利用者とは会話しながら思いや希望を把握しているが、最近は本人からそうした話が出なくなってきており、職員間では本人の思いをどのように酌んでいくか課題として話し合っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	・契約時、本人や家族から話を聞いている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	・生活記録、介護記録、申し送りノートに記録し、引継時、口頭で状況報告の上で申し送る。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	・介護計画は、家族・本人の希望や意見を取り入れて作成している。	利用者毎に担当者を決めずに職員全員による「ケース会議」で話し合ったうえで、計画作成担当のケアマネージャーが家族の希望も踏まえながら計画を作成する。短期、長期の職員評価により、計画に変更が必要になった場合は、家族に了解を得てケアマネージャーが変更している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	・生活記録、介護記録、申し送りノートに記録し、引継時、口頭で状況報告の上で申し送る。 (職員間の情報交換現状の把握)		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	・グループホーム内でのデイサービス、ショートステイは、実施していない。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	・支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	・基本的には、家族同行をお願いしていません。但し、緊急時については、家族の希望を優先させ、職員が同行支援する事がある。	原則は家族付添いであるが、職員同行が増えているなか、やり繰りが見つからない場合は、市社協のサービス事業である「すずらんふれ合いの会」に代行で同伴してもらっている。家族や代行が同行する場合は生活の状況やバイタルチェックの結果表等を持参してもらっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	・看護師がいないので、バイタルを測定し、日頃と変わった時は、すぐに病院受診しています。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	・入院が必要となった時は、その利用者の経過記録を報告する事や、普段の様子(介護サマリー)を詳しく伝えるようにしている。早期退院計画は、していない。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	・異常時は、かかりつけ医に連絡・受診し医師の判断をおおぐようにしています。	重度化については、医療が必要になった時以外是对応する旨を家族に説明している。終末期は、医療機関に委ねることを基本方針にしているが、現実には事業所で看取らざるを得ないケースも生じてきており、これまで2人を看取っている。現在も2人おり、在宅医療専門のクリニックと契約し、在宅看護制度を活用しながら、看取りに対応出来る体制を確立している。	終末期への対応に積極的な姿勢が感じられ、関係機関や家族との連携を強めながら支援にあたる事が期待され、これまでも増して職員のターミナルケアに関連する知識や看取りに関するスキルの習得に力を入れることを期待する。

自己	外部	項目	外部評価	
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	・マニュアルがあり、職員がいつも閲覧できる場所に置いている。	
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	・避難訓練は、年2回行っている。	両棟とディサービスセンターとの合同の火災避難訓練を春と秋に実施している。代表者は10年前まで消防団メンバーであり、防災に関する意識は高い。車椅子利用者やベットに仰臥している利用者の避難が訓練の重点項目になっている。 1号棟、2号棟とも居室が2階にあり、階段もやや急なことから、定期的な訓練に加え、リハビリも兼ねて、避難経路を通して外に出る運動を日常的に（日課として）実施するなど、意識的、継続的に防災避難訓練に取り組まることが期待される。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援				
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	・プライバシーや誇りに配慮し、普段から言葉使いについては、気をつけている。言葉使いや対応については、職員間で声を掛け合って直すように取り組んでおります。内部研修を行っている。	理念である笑顔で対応するなかで、大きな声や否定の言葉は避けるよう職員間で申し合わせている。一人ひとりの気持を斟酌しながら、その人の嫌がることや気に沿わないことを強いることのないよう気を付けている。プライバシーに関する資料を収集し内部研修を行っている。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	・方言を使用し、入居者とゆっくりと会話している。 ・服装、食事等で利用者に対して見守りの中で、自由にさせて支援している。	
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	・出来るだけ、多くの利用者の希望が実現できる様に、その都度、意向を伺っておりますがその希望全てに、応え切れない事もある。	
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	・入居者の希望に任せている。	
40	(15)	○食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	・入居者の希望に任せている。希望メニューを聞いたり、後片付けを一緒に行っている。	1号棟及び2号棟それぞれ職員が交代でメニュー作成や調理を行っているが、代表者は食事が最も重要と考えており、美味しくバランスの取れたメニュー作りに指導力を発揮している。山菜、魚介類など地元の山海の食材をもとに料理の腕を振うこともあり、利用者に喜ばれている。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	・身体状況や咀嚼能力に応じた献立に、努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	・声掛け誘導で行っております。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	・便、尿の回数チェックを行っています。声掛けで良い方、見守りが必要な方、積極的な関わりが必要な方、それぞれに合わせた排泄支援を実施しています。	殆どの利用者がトイレでの排泄である。声掛け、見守り、お手伝いなど、介助の必要に応じて支援している。リハビリパンツから布パンツに向けた改善に頑張る利用者もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	・便秘予防の為に、植物繊維、水分、乳製品を多く摂れる様な工夫と他に、適度な運動をしてもらう様支援しております。排泄チェック表を活用しています。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	・基本的には、入居者の自由にし、希望がない時は、3日に1回にしています。入浴中は、楽しく気持ちよく過ごして頂ける様、会話を多くし発言を引き出せる様に、心掛けている。	3日に1回、午前中に入浴することとしている。1号棟は個人浴槽、2号棟は複数入浴が可能な浴槽である。介助が必要な人、入浴を嫌がる人など、それぞれに合わせた介助や支援を行い、楽しい入浴になるよう努めている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	・入居時、タンスや布団は、普段から使い慣れている物が良いと伝え持ち込んでもらっている。又、就寝時間や昼寝時間は、決まらずに利用者のペースに任せている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	・医師の指示通り服薬を実行(ホーム管理)、注意をはらっている。服薬リストを介護日誌にセットし、職員全員が目をとおす様支持している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	・休憩室で歌を唄う入居者、塗り絵をする入居者、それぞれ好きなものをしてもらっています。得意分野で力を発揮してもらえる様、お願いできる様な仕事を頼み、感謝の気持ちを伝えるようにしています。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	・天気の良い日は、希望により日常的に散歩(施設中庭)を行ったり、バスハイクに出かけたりしています。 (桜見物、釜石大観音参拝等)	事業所周辺の散歩は震災後、河川改修やかさ上げ工事のため、ひっきりなしにダンプカーが通るため、事業所内の庭を歩く程度になっている。ディサービスセンターのマイクロバスを利用して四季に応じてバスハイクを企画したり、産直に買い物に行ったりと出来るだけ外出の機会を作るよう努めている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	・入居者の預かり金は、施設で管理している。入居者が希望する時は、職員が同行するなど対応しています。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	・家族や大切な人に手紙を出したいという入居者はおりませんが、家族に家族に電話をかけたいという入居者には、職員がついて支援しています。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	・共有の空間は、清潔第一に考えています。その上で快適に過ごして頂ける様、花を飾ったり、季節ごとの飾りつけを行いその雰囲気を楽しんでいただいています。	1号棟は2階にホール・食堂と居室があり、2号棟は1階のホール・食堂と2階の居室の間に階段の他、エレベーターが設置されている。両棟は2階の廊下で繋がっている。両棟とも暖色系の壁やフロアーになっており、落ち着いた雰囲気の中で利用者はホールのフロアーで寄り添って会話やゲームに興じるなどゆったりと過ごしている。津波後の修理で窓を二重サッシにしたところ、各居室に暖房機器が必要なくなっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	・談話室2階の廊下に椅子を用意し、思い思い過ごす場所は、確保できています。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	・入居時に居室は、自分の家と同じに考え、利用者に、今まで使用していた物を出来る限り使用する様勧め、利用者の好みに任せられています。	ベットは持ち込みやレンタルにより配置されている。窓は大きく明るく、清潔で気持ちよく過ごせる居室になっている。利用者によっては、好みの日用品を様々ならべ、個室の雰囲気を出している。	整理、整頓が行きとどいているが、日用品やパット類が部屋の隅に積まれている居室もあり、整理ダンス、小ロッカーなどの配置等の工夫も一考である。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	・廊下、階段、トイレなどすべて歩行できる場所は、手すりを設置し、浴槽には、入居者に合わせて使用できる様(浴槽内・外)に、椅子を設置しています。又、廊下には、一休みできる場所を設けるなどの工夫をしています。		